

長畝ふるさと通信



【2022年1月号】

■ 佐渡金山が世界文化遺産になる？

2月1日、政府は佐渡金山をユネスコの「世界文化遺産」に推薦することを正式に決定しました。佐渡島民は2015年から4回連続落選の屈辱もあり、このニュースに大いに沸いています。

佐渡金山は江戸時代初期に開山し、世界最大級の金山として江戸幕府の財政を支えてきたそうです。ゴールドラッシュの波に乗り、大勢の商人や労働者たちが押し寄せ、それまで海辺に十数件しかなかった相川の人口は、最盛期には5万人にまで達しました（現在の佐渡全体の人口が55000人ですから驚きです）。それらの人々の食糧を確保するため、佐渡では稲作が盛んになり現在に至っているのです。江戸時代後期には1800人も無宿人や罪人が強制連行され、過酷な労働を強いられていたことも事実であり、ボク等は子供のころから「流民・罪人の末裔」と言われからかわれることもありましたが（今でも酒に酔うと罪人の証として腕に2本線の入れ墨が浮き出るといふ自虐的なネタもあります・・・）。

明治以降は三菱に払下げとなり近代化を遂げましたが、採掘量が激減し平成元年に休山しました。近年は佐渡の鉄板観光地として多くの観光客で賑わってききましたが、時代の流れとともに衰退してきたようです。

今回の推薦決定には韓国からの反発もありますが、歴史を政争にせず、文化価値を評価していただきたいと思

っています。金山の世界遺産登録はコロナによる観光客減少から佐渡の経済を立て直す有効策として期待されていますが、これでは沖縄の米軍基地と同じではないかとも思っています。どこか他力本願で納得いかないもどかしさもあるのです。キレイごとでは生活していけません、手放しでは喜べない難しい問題です。

<道遊の割戸>

佐渡金山の象徴である「道遊の割戸」は標高252mの山が真っ二つに割れたもので、人間が手作業で金を求めた証であり、人間たちの欲望のシンボルとされています。ほぼ垂直に掘られた割戸の幅は約30m、深さは74mで、その下は明治以降に機械で掘ったそうです。「一念岩をも通す」と言いますが、その精神は見習いたいものです。



■ 温湯消毒始めました

平成20年から始めた温湯消毒作業も15年目を迎えました。当初180トン、ピーク時には200



トンもの種モミを処理していましたが、コメ生産量の減少に伴って、今ではおよそ2割減の145トンとなっています。2月下旬までの約1ヶ月の間、休むことなく続く作業で、仕事の無い冬場を凌ぐありがたい収入源だったのですが、当初から作業に出てくれた集落民も年とともに減っていき、今では集落以外の法人関係からも協力してもらいながら、何とか人員確保して続けている状態です。

佐渡の農業は稲作をはじめ、すでに島民の力だけでは支えきれない状態まで来ており、島外からの移住者も担い手として貴重な存在となっています。世界遺産登録をきっかけに、佐渡へ移住して農業をやる人が大勢集まってほしいと願っています。この際、国籍は問いません。

■ オミクロンに負けないで

年末には終息かと思ったら、オミクロン株で第6波が猛威を振るっています。佐渡でも数名の感染者が出て、濃厚接触者の自宅待機やら学校の休校やらでざわついています。飲食店も酒の提供を控え、営業時間も短縮するなど対応を求められています。ウイズコロナって何だろう。医療関係をはじめ、私たちの生活を支えてくださる全ての皆様に「負けないで！」と応援したい。



- 2月1日現在、雪はほぼ解けてしまいましたが、この空気感がたまらなく好きです。